

スイーツ王子とわたしのヒミツ

「これでよしと」

庄野麻里は最後の段ボールをたたみ、すっきりと片付いた新居を見渡した。

女性用のおまかせ単身バックという便利な引越しプランのおかげで、家財の搬入、設置から洋服の収納まで、女性作業員が丁寧にやってくれた。

麻里がしたことと言えば、作業員に家具の設置場所を指示し、下着やその他、細々としたものを詰め込んだ段ボールの荷解きをしたくらいだ。

「うん。今夜はぐっすり眠れそう！」

空気清浄器のスイッチを入れ、ベッドの上に仰向けにダイブする。ぼわんと体がはずみ、お気に入りのルームコロンの香りがふわりと広がった。

六月最後の日となった日曜日、麻里は住み慣れた都内のマンションを引き払い、千葉の湾岸沿いにあるマンションへと引っ越した。四年とちよつとの本社勤務を終え、明日から葉浦市にある桜田ハウス千葉支社に異動するからだ。

麻里が勤務する株式会社桜田ハウスは、「SAKURADA HOUSE」というブランドを展開

する、業界大手のハウスメーカーだ。住宅事業から都市開発、環境エネルギー事業まで、幅広く展開している。

そこで麻里は宣伝部に所属し、自社商品の新聞広告やテレビCMを企画する業務に就いていた。そして二十七歳になったばかりの今年の六月、千葉支社の住宅営業部に異動することが決まったのだ。

先週すでに、支社に向いて新しい上司への挨拶を済ませてある。住宅営業部営業一課の田村課長は、体重が百キロはありそうな恰幅のいい男性で、口を開けば気さくな言葉や冗談がポンポン飛び出す、なかなかお茶目な人物だった。当面、課長自ら麻里の面倒を見てくれるそうだ。

明日からは初めての営業職。不安がないわけではないが、大学を出たばかりの新入社員というわけでもないし、きつとなんとかなるだろう。

「今夜はおいしいものを食べて、早く寝ようっと」

自らを奮い立たせるように、麻里は勢いよくベッドから起き上がった。

このマンションの最寄りの駅前には大きなデパートがある。オフィスで着られそうなカジュアルブランドの服から、生活雑貨、書籍、地下の食品売り場まで、店も充実している。

普段はきちんと自炊をしている麻里だが、今日くらいはデパ地下で夕飯を調達してもいいだろう。食事が済んだら、実家の両親に引越し完了の連絡をするつもりだ。

両親は麻里の突然の転勤に驚き、引越しを手伝いたいと言ってくれたが、大安吉日の今日は親戚の結婚式に呼ばれていたため名古屋に行っている。帰ってくるのは夜遅くだと聞いていた。

麻里はクローゼットを開け、着替えを引っ張り出した。そのとき、衣類の隙間から一枚の写真が足元に落ちた。

「あ……」

しゃがんでそれを拾い上げ、言葉もなく。どうしてこんなものが――

写っていたのは、笑顔で肩を寄せ合う三人の男女。たぶん去年のクリスマスパーティーのときに撮ったものだ。向かって左が麻里、右が同期入社で宣伝部の同僚だった矢部智花。

そして二人の間で、くったくのない笑顔を見せているのが坪内明彦。広告代理店に勤務する、二十九歳のエリートだ。彼の会社が桜田ハウスの広告を請け負っている関係で、二年ほど前に知り合った。以来、智花も含めて公私にわたる付き合いをしてきたが、いつしか麻里は彼に片想いをしていた。

けれど今年のゴールデンウィーク、坪内は麻里の目の前で智花にプロポーズし、二人は間もなく婚約した。麻里は人知れず涙して、二人から少しでも距離をおこうと転勤を希望した……というわけだ。

失恋のたびに引越していたら、キリがない。わかっていたが、こうでもしなくては立ち直れないほど、麻里が心に負った傷は大きかった。

もう、終わった恋よ。

思い切って写真を破くと、麻里はその紙くずをゴミ箱に押し込んだ。

麻里がマンションを出たのは、夕方の五時だった。ノースリーブのブラウスの上にニットのボレロを羽織り、ショートパンツにサンダル姿でのんびりと歩く。

デパートまでは十分もかからなかった。入口で館内パンフレットを取った麻里は、それを見ながら地下の食品売り場を目指す。最初に向かうのは、人気洋菓子店『マダム・ルブラン』だ。都内にも店舗を構えるこの人気店は品ぞろえが豊富で、とりわけ毎月末日にしか販売されないスワンシューが大人気だ。

スワンシューというのは、その名のとおり白鳥の形をしたシュークリームである。

常時販売されている丸いシュークリームと味は同じなのだが、その可憐な姿が人気を呼び、都内の店舗では毎月発売日になると開店直後から行列ができて、昼過ぎには完売してしまう。

だが、このデパートでは夕方まで残っていることが多い――。ネット上ではそんな情報が広まっていた。だから麻里は安心して、引越しの片付けを済ませてから来てみた。しかし日曜日ということもあってか、夕方のタイムサービスが始まった地下の食品売り場は予想以上に混んでいた。麻里は急に不安になる。

どうか、スワンシューが残っていますように！

一人で引越しを頑張ったご褒美に、ぜひとも食べたい。祈るような思いで急ぐ麻里だが、混雑のせいでなかなか前に進めない。おまけに突然誰かに背中を押されて、転倒しそうになった。

「きゃっ！」

体が前のめりになり、恐怖を感じた。次の瞬間、誰かが麻里の前に飛び出してくる。

「危ない！」

声と同時に腕が差し伸べられ、麻里はすんでのところでその人物に抱きとめられた。

「大丈夫ですか？」

頭上から、優しい言葉がかけられた。麻里が恐る恐る顔を上げると、引越し疲れも吹き飛ばすような、見目麗しい男がこちらを見下ろしていた。

「だ……、大丈夫です。ありがとうございます」

きりりとした涼しげな目、すっきりとした顎のライン。やや明るくて清潔感のある髪。あまりのイケメンぶりに、麻里の声は震えてしまう。

歳は三十くらいだろうか。世間はクールビズに移行しているが、彼はスーツの上着を着てきちんとネクタイを結んでいた。まるでドラマのような出会いに、ドキドキし過ぎて言葉が出てこない。

彼は麻里の手を取りその場に立たせてから、落としたバッグを拾ってくれた。

「はい、どうぞ」

「まあ、すみません！」

我に返った麻里は、財布の入った小さなトートバッグを受け取ると、腰を直角に曲げてお辞儀した。

彼は爽やかに笑う。

「いえいえ、怪我がなくて良かったです。この売り場は、夕方五時からのタイムセールに客が殺到するんですよ。しかも今日は週末特別セールなんかもやってるんで、フロアはいつも以上に混み

合っています」

「そうなんですか。お詳しいんですね」

「ええ、よく来るんです。近くに住んでますから」

うそ、ほんとに？　もしかしたら、また会える？

「そんなわけですから、足元には十分に注意してくださいね」

「は、はいっ！　ありがとうございます」

彼はもう一度につこり微笑むと軽く会釈して、人ごみの中へと去って行く。

麻里はうつとりしながら、彼の凛々しい後ろ姿を見送った。広い肩、逆三角形の上半身、長い脚。声はちよつぴりセクシーで、優しく頼もしそうな雰囲気の男性だった。しかも近所に住んでいるみたいだから、また会える可能性も高い。

大安吉日。良いことあった——！

うれしくて、舞い上がりそうになる。

失恋したばかりだというのに、イイ男を前にして浮かれるなんて、立ち直りが早過ぎるだろうか。だけど新しい出会いに見えぬふりをしていては、先に進めない。

新しい職場にも、あんな人がいたらいいな。仕事の励みになるよね。

そんなことを考えながら、麻里はマダム・ルブランの売り場に急いだ。すぐに「スワンシューマがあります！」という手書きのポップが見えてほっとした——はずなのだが。

先ほどのイケメンがショーケースの前に立っていて、麻里はびっくりした。彼は何を注文しよう

か、考えているようだ。

へえー。この人も、マダム・ルブランのスイーツがお目当てだったのか。

さつきはどうも……と彼に言いかけて、麻里は立ち止まる。ショーケースの中に並ぶスイーツを見つめる彼の横顔に、とろけるような甘い笑みが浮かんだのだ。

まるで愛おしい恋人を見守っているときのような、やわらかい笑み。

よ、よっぽどスイーツが好きなのかしら……

うっとりとした自分の世界に入り込んでいる彼の横顔から、何故か目が離せない。そのとき、麻里の前に店員が立った。

「いらっしやいませ、ご注文はお決まりですか？」

「あ、はい……！」

麻里は慌てて、ショーケースの中をのぞき込む。そこにはいくつかのスイーツに交じって、最後のひとつとなったスワンシューマがあった。

その小さな白鳥は、黄金色に焼けたシューの羽をふんわりと左右に広げ、優雅な曲線を描く細い首を可憐にもたげていた。羽には白い粉砂糖が振りかけられ、シューの内側には雪のように真っ白なクリームがたっぷり詰め込まれている。

あのクリームが、コクがありながらも後味がさっぱりとしていておいしいのだ。

一歩進み出ると、麻里は店員に向かって大きな声で言った。

「スワンシューマください！」

すると、先ほどのイケメンも同時に同じ言葉を発していた。

「ええっ！」

驚いた麻里が横を向くと、彼の鋭い視線とぶつかった。

「ごめんなさい、そのスワンシューはわたしが……」

相手の不機嫌そうな表情に少し怯えながら、麻里は権利を主張する。すぐに彼は反論した。

「いや、俺のほうが先に並んでました。申し訳ないが、最後の一個は俺がもらいます」

「え？ それは……」

確かに彼は先に来ていたし、麻里を助けてくれたときとは別人のような甘い表情を浮かべて、スイーツを眺めていた。

「でも、注文したのは同時でしたよね？」

麻里は言い返した。

普段の彼女ならあつさりと引き下がったかもしれないが、さっきはあんなに紳士的だった彼が、意地でも譲らないぞという態度を見せたことに驚き、つい応戦してしまったのだ。

「そうだ。じゃんけんしませんか？」

それが最も公平だろう。店員たちも、ほっとしたようにうなずいている。だが彼は、大きく首を横に振った。

「お断りします」

「そんなあ……。わたし、一か月ぶりのスワンシューを楽しみにしてたんですよ」

「俺は先月、残業で買いそびれました。だから二か月待ちです」

「でもでも、わたしは今日この町に引っ越して来たんです。これは自分への引越し祝いなんです！」

「へえー、じゃあ俺はこの町に五年住んでるから、転入五年祝いをしよう」

「な、なんですって？」

彼は意地悪く笑った。何がなんでも譲るつもりはないらしい。これ以上やりとりをしても店員たちを困らせるだけだし、もう諦めてしまおうか。

しかし、相手がスラックスのポケットからスタイリッシュな黒の財布を取り出した瞬間、やはりどうしてもスワンシューが食べたくなった。

「待って、やっぱりじゃんけんを……」

「やだね」

「そこをなんとか！」

「俺に泣き落としは通用しない！」

「な、泣き落としなんかじゃないわ！ これを食べて英気を養って、明日から始まる新しい仕事に臨みたいんです。わたし、転勤になって……」

バカバカわたし！ 初対面の相手に、いったい何を言ってるのよ！

麻里は喋り過ぎたことに気づいて口を両手で塞ぐ。彼は財布を手にしたまま麻里を一瞥すると、尋ねてきた。

「お仕事はなんですか？ ずいぶんねばり強さが必要な業界なんですね」

「住宅関係ですが、何か？」

正直に答える必要はないのに、思わず口から出てしまった。相手がいつそうじろじろ見てきたので、麻里は居心地が悪くなる。

「いえ、だから……。じゃんけんをするチャンスだけでもください。負けたら諦めますから」

麻里が頭を下げると、彼はため息をもらして意外な返事をした。

「わかりました。だったら引越し祝いにお譲りします」

「え？」

「スワンシューを譲ると言っただけです」

「ほんとに？」

「ほんとです。俺の気が変わらないうちに、さっさと買ってください」

彼は店員に「スワンシューを彼女に」と伝え、他のケーキや焼き菓子をいくつか注文した。

「ありがとうございます」

「お礼なら結構です。それより、明日からの新しいお仕事、頑張ってください」

麻里が彼に礼を言うと、彼は支払いをしながら、そっけなく言った。理由はわからないが、麻里の口にした何かが彼の琴線きんせんに触れたのかもしれない。

麻里は胸がじんわりと温かくなった。キツイことも言われたが、最初の印象どおり、彼は優しい人のようなのだ。

「お土産……ですか？ ずいぶんたくさん買われるんですね」

丁寧ていねいに箱詰めされていくケーキやタルト、フィナンシェにマドレーヌ、そしてカラフルなマカロンの数々。麻里は思わず彼に尋ねていた。

「いいえ」

彼はびしりと言った。そしてケーキと焼き菓子が詰まった二つの箱を受け取ると、麻里に視線を向ける。

「全部、俺一人で食べるんです。男が甘党だって、おかしくないでしょ」

そう言っただけ、彼はその場を後にした。

2

おかしくないわ。うん、全然おかしくない。

翌日。麻里は支社の人事課で所属部署の上司を待ちながら、昨日、デパ地下で出会ったスイーツ男の言葉を思い出していた。何故それを思い出したかという点、目の前にお茶とマダム・ルブランのマドレーヌが置いてあるからだ。人事の担当は菅谷すがやという課長職の男性で、上司を待つ麻里にお茶とお菓子を出してくれたのだ。

『男が甘党だって、おかしくないでしょ』

彼が最後に発した言葉からは、まるで自身がスイーツ好きであることにコンプレックスを持って

いるような印象を受けた。

気にすることかなあ——

昨今は雑誌やテレビで甘いものが好きなスイーツ男子の特集が生まれ、話題になっている。甘党の男性は珍しいわけでもないのに、と麻里は思う。

「でね、庄野さん……庄野さん？」

「あ、は、はい！」

余計なことを考えていたせいで、菅谷の問いかけに気づくのが少し遅れた。

「庄野さんが配属になる住宅営業部の営業一課は、個人向けの戸建て住宅を担当しています」

「はい。存じております」

「一課はこのフロアの一つ下の三階で、ショールームは二階ですからね」

お茶とお菓子をすすめながら、菅谷はフロアの説明をしてくれた。

千葉支社は葉浦市の東部、大型ニュータウンからほど近い場所にある。五階建ての自社のビルの一階にはコンビニやカフェなどが入り、二階が住宅設備や内外装のサンプルを展示したショールーム、三階から上がおフィスになっていた。

駅からも近く、窓からは駅に向かって伸びる大通りが見下ろせる。

「東京と違って、会社帰りに飲み食いする場所は少ないんですが、まあ、住めば都と言いますし」ふと窓の外に目をやった麻里に気づき、菅谷はそんなふうに言った。

「いいえ。大通りにはかわいい雑貨屋さんや服屋さんもありますし、街路樹も素敵だし……良い街

だと思います」

「そうですね。だったらいいんですけどね。女性に人気のお店などは、一課の者が教えてくれるでしょう。おや、噂をすれば、迎えが来たようですよ」

菅谷は、麻里の背後に向かって手を上げた。麻里は新しい上司に改めて挨拶しようとして立ち上がり、振り返って目が点になった。

てつきり田村課長が来るものと思っていたが、やって来たのはもつと若くて爽やかな長身の男性。しかも——

「遅くなりました」

男は麻里の前で立ち止まり、軽く会釈した。そして麻里と目が合うと、菅谷には気づかれないように、冷ややかな視線を送って来る。

うそ！ 昨日の人？

声をあげそうになり、麻里は慌てて口元を押さえる。現れたのは、昨日デパ地下で会ったスイーツ男だ。昨日同様、きつちりとスーツを着こなしている。

「葉月、こちらが本社から異動して来た庄野麻里さんだよ。話は聞いてるよね」

「はい。田村課長から聞いてます」

「は、はじめまして、庄野です」

菅谷が紹介してくれたので、麻里は急いで挨拶した。初対面ではないが、「昨日はどうも」とは言えない空気がぶんぶん漂っている。

「庄野さん、彼は一課主任の葉月聡。当面、あなたの教育係を担当します」
菅谷は、にこやかに言った。

「三十一歳、独身。営業成績かなり良好。剣道三段。見てくれがいいので、千葉支社のイケメン担当と呼ばれてます。だけどカノジョなし。目下のところ募集中……。だよなあ、葉月」

菅谷がおどけた調子で続けると、聡はあからさまに眉をひそめた。

彼との突然の再会に、麻里は心がざわつく。それに、田村はどうしたのだろう。事前の挨拶では、田村が麻里の面倒を見てくれるという話だったはずだ。

その疑問に答えるかのように、聡が口を開いた。

「田村課長は急病で入院したから」

「入院？」

驚く麻里に、菅谷が補足する。

「そうなんだよ。言い忘れてすまないね。持病が悪化して、一昨日の土曜日に緊急入院したんだ」
ねっ……と、同意を求めるように、菅谷は聡を見た。聡は麻里をじっと見つめながら、「ええ」
とだけ返事した。菅谷はそれに構わず続ける。

「たぶん今週中にも、手術をするはずですよ。復帰まで半月以上かかると聞いています」

「そうだったんですか。先週お会いしたときは、お元氣そうだったのに……」

麻里は聡の鋭い視線から逃げるように、菅谷のほうを向いて言った。しかし聡は目をそらさない。
剣道三段とのことだが、まるで対戦相手を威嚇するかのよう、麻里をにらんでくる。何か恨みで

もあるのだろうか。

恨み？ まさか――

「それがねえ、大きな声では言えないんだけどね」

麻里の動揺に気づかない菅谷は、くすつと笑って声をひそめる。

「田村は『痔持ち』でねえ。我慢し過ぎて、悪化したんだ。ほらあの男、なかなか恰幅がいいだろう？ 座るだけで相当負担がかかるんだよ……」

くくくつと菅谷は笑ったが、麻里はそれどころではなかった。聡は、昨日のスワンシューの件を根に持っているのではないだろうか。気前よく譲ったものの、家に帰ったらやっぱり後悔したのかもしれない。

「庄野さん、しばらくは俺の指示で動いてもらう。それでは、我々はこれで失礼します」

唐突に聡が会話を打ち切り、目だけで麻里に行くぞと促した。

「そうお？ じゃあ、庄野さん。慣れないうちは大変だろうけど頑張っつてね」

「はい、いろいろとありがとうございます」

「葉月。彼女をよろしくお願いしますよ」

そう菅谷が言ったところで麻里は、まだ聡によるしくのひとことも言っただけでなかったことに気がついた。

「葉月主任、これからよろしくお願いします」

麻里が勢いよく頭を下げると、聡はそっけなく「こちらこそ」と言った。

菅谷に一礼し、聡はその場を離れる。麻里もそれにならったが、聡は麻里を待たずに足早に行つてしまふ。置いていかれまいと、麻里は小走りに彼の後を追つた。

「あの、葉月主任」

「何？」

無言の空気が重過ぎて、麻里は声をかけた。聡は歩くスピードを緩めることなく答える。

「いえ、あの、昨日のことなんですが……」

「昨日は営業一課が担当するバス見学会があつてさ。お客様を県内各所の分譲住宅に案内してた。うちは週末は忙しいよ。イベントや商談会があるから」

「そうなんですか」

改めてスワンシューのお礼を言おうと思つたのに、さらりとほぐらかされた。

でも、五時過ぎにはデパ地下にいたじゃない——そう突っ込んでみようと思つたが、言い出せそうにない。

廊下の突き当たりにあるエレベーターホールまで来て、聡が立ち止まる。エレベーターのボタンを押すのを見て、麻里は首をかしげた。一つ下の階に降りるのだから、階段を使えばいいのに。

「庄野さんは、本社ですつと宣伝部だつたんですか？」

今度は彼から話を振つてきた。

「いえ、入社してすぐは総務でした。三年目から宣伝部です」

「そう。宣伝部つて、WEBや新聞の広告を作つてるんだよね？」

「はい。わたしはずつとテレビCMの担当でしたけど」

「へえ、CMか。うちの会社のCMは、なかなか面白いよな。ところで、実家はどこ？」

エレベーターが到着すると、それに乗るよう手で促しながら、聡はそんなことを聞いてきた。

「県内です。実家から通えないこともないんですけど、ずつと一人暮らしだったんで、あのデパートの近くのマンションに……」

デパートと言つた途端、聡の横顔が強張つた。エレベーターには麻里と聡だけ。見れば聡はまだ階数のボタンを押していない。

「庄野さん」

「は、はいっ」

「スワンシューは、おいしかった？」

聡は顔を麻里に向け、鋭い目つきでぎろりとらんだ。麻里は震え上がる。

「え、ええ……。とつてもおいしかったです」

昨日の夕食の後、コーヒート一緒に味わいながら食べた。

「へええ……。良かったねえ。俺なんてまた一か月待たなきゃならないのに」

ブラック過ぎる聡の笑みに、麻里は後ずさる。すると、聡もゆつくりと近づいてきた。麻里はすぐにエレベーターの隅に追いつめられてしまった。

「ご、ごめんなさいー！」

麻里は大きな声で謝つた。彼はやっぱり怒つていたので。

聡は壁に両手をつけて、麻里が逃げられないように腕の中に囲った。

「謝ることはないさ。俺が君に譲ったんだから」

「で、でもあの……、そうだ、次の発売日にはわたしが買ってお返しします。有休を取ってでも行きます。だから……」

許してと言いたかったのだが、聡がグツと顔を近づけたので、言葉が出なくなってしまう。美形だけに、怒ると迫力がある。これが彼の本性なのだろうか。食べ物の恨みは恐ろしいというし、これがきつかけでいじめられたらどうしよう。

しかし聡は無言で麻里から離れると、三階のボタンを押した。ふわっと体が浮く感覚があったが、エレベーターはすぐに止まる。ドアが開くと聡は麻里を促し、エレベーターを降りてすぐの会議室に連れ込んだ。

「悪いと思うなら、頼みがある」

聡は後ろ手にドアを閉めると麻里ににじり寄り、壁かべ際に追いつめた。

「頼み……？」

「ああ。昨日、デパ地下で俺に会ったことは誰にも言わないでくれ」

聡は小声で言う。

「俺とは今日、初めて会った……。そういうことにしておいてほしいんだ」

「は、はい……。わかりました。余計なことは言いません」

「スワンシューのことも、俺が他のケーキを買っていたことも、一切内緒。わかった？」

麻里は、こくこくと首を縦に振る。話は見えないが、とにかく言うとおりにしたほうがよきさうだ。

「よろしい。約束だぞ。忘れるなよ」

聡の表情が和なごらいだったので、麻里は思わず疑問を口にしてしまった。

「けど、どうして内緒にするんですか？」

「理由なんかどうでもいい。とにかく、余計なことは喋しゃべるなってこと」

ぴしやりと言われて、麻里は再び震え上がる。

聡はどうしてもあのデパートにいたことを知られたくないようだ。昨日は、仕事を抜け出してスワンシューを買いに行ったのかもしれない。それを同僚に知られたら立場がない——ということだろうか。

あるいは同じ課に好きな女の子がいて、彼女に変な誤解をされたくない——とか？

菅谷課長の言葉どおり彼女募集中なのだとしたら、後者のほうがありそうだ。事情を知らない麻里が、

「主任、昨日のスワンシュー、おいしかったです。ご馳走ちそう様でしたあ」

なんて馴れ馴れしく話しかけたら、彼女が麻里と聡の関係を誤解してしまう可能性もある。

とにかく、麻里は早く彼に離れてほしくて、もう一度、はいと小さく返事した。

「オッケー」

すると、聡の顔に昨日麻里を助けてくれたときのような、優しそうな微笑ほほえみが浮かんだ。

「千葉支社へようこそ、庄野さん。これからガンガン働いてもらうからな」
聡は麻里の肩をぼんとたたくと、会議室のドアに向かった。

3

なんだか厄介な人が上司になっちゃったなあ……

目の前を歩く聡の背を見ながら、麻里は自分の前途に大きな不安を覚えた。

千葉支社のイケメン担当——。デパ地下では麻里を助けてくれたが、その直後にスワンシューを取り合った。それでも最終的に譲ってくれたから優しい人だと思っていたのに、今日の態度はどういうことなのだろう。麻里は彼に聞こえないよう、小さくため息をついた。

その後、一課の朝のミーティングで麻里は自己紹介をした。同僚たちは皆気さくで、麻里を温かく迎え入れてくれた。

営業一課には、営業部員とそのサポートをする営業事務がいる。営業部員はほとんどが男性で、唯一の女性は、先月から産休に入っているそうだ。一方、営業事務は全員が女性で、ショールームの受付業務も担当することから制服を着用している。

麻里は、産休に入った女性の代役として異動してきた。しかし、もともと女性の営業部員が少ないので、できればこの先も営業として一課に残ってほしい——。田村にはそう言われている。

麻里のデスクは聡の隣だった。またしても、ため息がもれそうになる。

ミーティング後、聡に連れられて、同じフロアに机を並べる営業二課と工事部、設計部にも挨拶をした。それからデスクに戻ると、聡は早口で言う。

「支社は火曜と水曜が休みだから、月曜は忙しい。特に営業は、土日のイベントに会場してくれたお客様の自宅への訪問、夕方には他部署との合同会議があるからね」

「わかりました」

「その他細かいことは、福田ふくだに聞いておけ。俺はちょっと出てくるから」

聡は、向かいの席に座る髪の毛の長い女性を指差した。やや頬骨ほおぼねが高くて、目鼻立ちがはっきりとしている。先ほど営業事務のメンバーを紹介されたが、その中では年長に見えた人だ。

「昼過ぎには戻るから、その後、施工現場を案内する。出られる用意をしておけよ。じゃあ福田、頼んだぞ」

手早く荷物をまとめながら聡は言った。麻里は自分に注そそがれる彼女の視線を意識しつつ、足早に去っていく聡の背中に声をかける。

「わかりました。行つてらっしゃい」

「葉月、こつちも了解。安心して行つといいでー」

は——？

意外なほどフランクな口調に驚き、麻里は振り返る。

「あたしは、福田さおひ沙織。よろしくね。庄野さん」

ワンレングスの髪をかき上げ、沙織は向かい側の席からひらひらと手を振った。

「庄野です、よろしくお願ひします」

麻里は、ぺこりとお辞儀をする。

「細かいことつて言つても、そんなに難しくないので安心して。あつちで話そうか」

資料を手に立ち上がった沙織が、パーティションで仕切られたブースを指差した。沙織の後を追つてオフィス内を移動していると、彼女が言う。

「あたし、葉月とは同期入社なんだ。だからつい、呼び捨てにしちゃう。葉月はあまり愛想がないけど、基本良い奴だから信用して大丈夫だよ」

へえー。主任と同期。

それなら沙織も三十歳にはなつていそうだ。道理で落ち着いて見えるはずだ。

「クールなキャラなんですか？ 主任は」

「うん、職場ではね。けど責任感が強くて、しつかり後輩の面倒も見てくれるから安心して」

「はあ……」

「しかもお客様の前では、態度が変わるの。甘い顔でにつこり突つてセールストークもできちゃうんだから、そりゃあ営業成績も良くなるよね。一課のホープよ」

褒めてるんだかけなしてるんだかよくわからないが、麻里は一応うなずいておく。

「まあ、見れば追々わかるよ。じゃあ、一課の業務内容から簡単に説明しようか」

二人でブースに入ると、沙織は机に資料を広げて、住宅営業部の概要や売り上げなどをわかりや

すく説明してくれた。

お昼までは沙織の話聞き、その後は一課の女子社員たちと一緒に、近所のベーカリーカフェに行った。本社での業務内容や支社の情報などを含めた女子トークに花が咲く。楽しいランチタイムを過ごして職場に戻った。

聡が戻つて来たのは、午後二時だった。ちょうどそのとき、一課の女子社員で共同購入したというお取り寄せスイーツが宅配便で届き、手の空いた女子たちが分配をしていた。

「主任の分は、給湯室にあります。冷蔵庫に生チョコレートが入ってるんで、忘れないでくださいね」

「ああ、サンキュ」

そんなやり取りが聞こえ、麻里は振り返った。女子社員たちは戻ったばかりの聡を囲んでいる。彼は人気があるようだ。麻里はふと、学生時代に人気のあった男子が、バレンタインのとき女子たちに囲まれていた光景を思い出した。

「葉月も誘われて、毎回買うのよ。ああ見えて、付き合いはいいんだから」

沙織の説明に、麻里は大きくうなずいた。共同購入しているのは、北海道の人気スイーツブランド『ホイス』の商品だ。

スイーツが大好きな人なら、ホイスには目がないだろう。

「あいつ自身は甘いもの苦手だけど、たまに遊びに来るお姉さんの子どもたちにあげるからって、女の子たちにまぎって買つてるの」

ん？ 今なんて？ 甘いものが苦手？

「ちょっと待ってください」

麻里は沙織に尋ねた。

「自分が食べるために、買ってるんじゃないんですか？」

「違うよ。あいつは甘いのが苦手。バレンタインの義理チョコだって受け取らないもの」

「ええっ？」

何かおかしい。しかしすぐに聡がやって来て、麻里の真後ろに立った。

「飯は済んでるか？」

「あ、はい！」

「じゃあ、行くぞ。用意しろ」

「はい。ただいま！」

沙織にはもっと聞きたいことがあったが、麻里は仕方なくバッグを抱えて聡の後を追った。

エレベーターで地下にある社員駐車場に降りて、聡の車だというホンダの白いセダンに案内される。聡はにこりともせずに助手席のドアを開け、麻里が乗ったのを確認してからドアを閉めてくれた。親切な行為だが、ずっと無言である。そして自分も乗り込み、黙ったまま車を発進させた。

「車、綺麗ですね」

「ああ」

返事はあったが不機嫌そうだ。

「もしかして、自分の車でお客様をご案内することもあるんですか？」

「あるよ」

「そうなんですか。それは綺麗にしておかないといけませんね」

今度は返事がなかった。沙織の言ったとおり、無愛想だ。とはいえ、車内に二人きりなのにずっとこの調子でいくつもりなのか。麻里は思い切って、気になっていたことを尋ねようとした。

「あの主任。もしかして……」

「ああ、そうだよ。君が思ってるとおりだ」

駅前の交差点。信号が赤に変わって、車は一時停止する。

「本当はスイーツが好きなのに、嫌いなふりをしてるんですか？」

「嫌いなふりなんかしてない。好きだと公言してないだけだ」

麻里は首をかしげる。

「でも、女の子たちとお取り寄せもしてるんですよね？」

「ホイスの生チョコは好物なんだ」

「うわ、偶然。わたしも大好きです。でも、だったら普通に好きだって言えば……」

「言えるわけない。かつこ悪いだろ」

「かつこ悪い？」

「三十過ぎた男が、甘いものに目がない。白鳥の形のシュークリームを眺めて涎よだれを垂らしそうにしていた。みつともないし、かつこ悪い。そう思わないか？」

確かに昨日の聡は、最後のひとつとなったスワンシユを眺め、うつとりとした表情を浮かべていた。しかし、それを見てかっこ悪いとは思わなかった。

どちらかというところ、自分と同じスイーツが好きなのかと親しみを感じた。

「そうでしょうか。三十だろうが四十だろうが、好きなものは好きでいいと思います。誰に迷惑かけるわけでもないんですから」

「嘘だな」

速攻で否定される。

「どうせ内心笑ってるんだろう。とにかく俺の中では、男はクールであるべきなんだ」

麻里に反論を許さず、それつきり聡は黙り込んだ。

十分も走らないうちに、車は千葉支社が施工、販売している分譲住宅の区画に到着した。

立ち並ぶ家の外観や植栽などがバランスよく整っていて美しい。現在分譲中の区画は八割がた成約済みだと、聡が説明してくれる。

彼は、モデルハウスの看板の出た家の前に車を止めた。桜田ハウスの主力商品である、モダンなデザインが売りの鉄骨系住宅だ。屋根に取り付けたソーラーパネルが、午後の日差しを反射して輝いている。

ふと麻里は、本社で最後に手がけたテレビCMを思い出した。カップルが手をつなぎながら一軒の美しい家を見上げている。やがて彼氏がプロポーズの言葉をつぶやき、「いつかは桜田ハウス」というフレーズが流れる——というものだ。

ロケ地は横浜だったが、あのCMで使ったのもこの商品だ。そして、麻里が想いを寄せていた坪内もこのCMに携わっていた。

彼を思い出し、急に切なくなる。

「庄野」

車外に出て屋根を見上げていると、聡が近づいてきた。

「どうかしたのか？」

「い、いいえ。別になんでもありません」

「そうか、ならいいんだが。それよりさっき話したとおり、俺が甘党だっことは職場には内緒にしておきたい」

「わかりました。皆には黙ってます」

「ほんとに？」

「はい、約束します。そのほうが主任は気が楽なんじゃない？」

「ああ」

「だったら、言いません」

聡の顔がぱっと明るくなる。

彼の価値観はよくわからないが、本人が嫌だと言う以上、まわりにばらすつもりはない。

「ありがとう、庄野。いや、庄野さん。黙っててくれるなら、そのうち埋め合わせをするから」

「庄野でいいです。それと、お礼もいりません。昨日スワンシユを譲ってもらいましたし」

「そうか。だったらこれは二人だけの秘密ということだ」
二人だけの秘密。

胸の奥がくすぐったくなるような言葉を、彼はさらりと口にした。麻里は思わず、ドキッとしてしまった。一方の彼は、平然としている。

「じゃあ、向こうの家を案内する。今は内装工事をやっているとこだ」

聡は、桜田ハウスのロゴが付いたシートで覆われた家を指差した。確かに、工場の音が響いている。

麻里は返事をして、素直に彼の後を追った。

4

初日、麻里は少し遅くまで会社に残った。もちろん聡も一緒だ。今後の予定や、営業として身に着けておくべきスキルや資格について、アドバイスを受けたのだ。

資格かあ……

入社から四年が過ぎたが、麻里は住宅営業に必要な資格を持っていなかった。麻里自身、営業部に転職するとは思っていなかったたので、仕方がないのだが。

これから取得に向けて勉強しようと決める。聡が丁寧に説明してくれる事項を、ひと言ももらさ

ぬようノートにメモしながら、麻里は自分なりにこれからの予定を頭の中で組み立てた。

その翌日の火曜日。休日だからと朝寝坊して起きたところに、実家の母の来訪を受けた。引越し祝いとして、名古屋で買ったという味噌カツを模したエクレアを持って来てくれた。

これって葉月主任が喜びそう！

保冷ケースに入ったエクレアを見た瞬間、麻里は聡の仏頂面を思い浮かべた。とそこで、我に返る。何故、彼が思い浮かんだのだろうか。

それから出かける準備をし、母と近所を散策した。昼には、駅前のデパートに入っている日本料理店で、懐石ランチをご馳走になった。その後、母に付き合ってもらって、仕事用の靴を選ぶ。

手持ちの靴でも外回りには十分耐えられるはずだが、気合を入れるためにも、「長時間履いても疲れない！」という機能性をアピールした、海外ブランドの靴を二足買い込んだ。

そして休日の二日目、水曜日。

明日以降の予習をしておこうと、麻里は休日のオフィスにやって来た。営業一課には誰もいないが、他の課にはちらほらと、カジュアルな服装で休日出勤している者の姿がある。

「あれ、庄野さん？ 転勤早々、お休みなのに熱心だね」

パソコンを起動したところで話しかけてきたのは、ブルーのポロシャツに、膝下丈の涼しそうなパンツをはいた男性。確か営業二課だったはず。

一課が個人向けの住宅を担当するのに対し、二課は賃貸住宅の建設や経営などを担当している。

えーと、名前、名前……。誰だっけ……。この人……

髪にやや強めのパーマをかけ、うっすらと鬚髭を生やした彼の名前がすぐには思い出せない。

「おはようございます。はい、あの。覚えることが多いので」

仕方がないので曖昧な返事をする、相手は顔をくしゃつとさせて笑った。

「吉祥寺敦だよ、これでも葉月と同期なんだ。覚えといてねー」

「あつ、そうでした。吉祥寺さん、わたしのほうこそ、よろしくお願いします」

麻里はべこりとお辞儀した。

「そんな、かしこまらないですよ。俺は葉月と違ってフレンドリーだから、困ったことがあったら言っただけ」

「はい、ありがとうございます」

「葉月もさ、仕事中はおつかない顔してるけど、根は良い奴だから安心して」

そう言い残すと、吉祥寺は麻里に手を振りながら自分の席に戻った。

人望があるのね……

沙織も聡のことを良い奴だと言っていた。一緒に仕事をしていくうちに、自分も彼を良い人だと感じる場面に出くわすだろうか。

そう思ったらしいなど、麻里は仕事に取りかかりながら思った。

木曜日。今日から本格的に、聡と一緒に営業に出る。朝のミーティングが終わると、支給された新しい名刺と新しい社用携帯をバッグに入れ、聡の車で市内にある大手企業の社宅に向かう。

そしてそこに住む、注文住宅を検討中だという若い夫婦のもとを訪ねた。

「先日は桜田ハウスのショールームにお越しいただき、ありがとうございます」

聡は、赤ちゃんを抱いた女性に優しい語り口で挨拶すると、麻里を新しい営業だと紹介してくれた。

それから自社のサービス内容を玄関先で説明する。

「当社では資金計画から間取り図の作成まで、すべて無料でプランニングをいたしております。ぜひ一度、お客様のお住まいに対するご希望をお聞かせください。経験豊富なスタッフが全力を挙げ、お客様の夢の実現をお手伝いいたしますので」

ひととおり説明した後は、パンフレットやキャンペーンチラシと一緒に、小さな花の鉢植えを手渡し、その場を辞した。初めて訪問するお客様には鉢植えをプレゼントするのが、千葉支社の習わしだそうだった。

聡を前にして、若い母親の表情は終止晴れやかだった。朝からこんなイケメンがお花を持って現れたら、たいていの女性はウキウキしてしまうだろう。

沙織から聞いていたとおり、聡は営業の場では表情も声もがらりと変わっていた。

さすが、一課のホープ。

感心して、彼の横顔を見ていると、

「次。行くぞ」

と、そっけない声が返ってきた。お客様に見せる顔と麻里に見せる顔は、別物のようだ。

その後も同じように訪問営業を行い、手軽なイタリアンレストランでサービスランチを食べて帰社した。

午後からは、シヨールームでお客様に間取り図と見積書のご提案。それが終わると、プレゼン用の資料作成やキャンペーンの準備を手伝う。あいた時間には、関連部署との打ち合わせ。麻里はそれから数日間、そんな感じで忙しく過ごすことになった。

再び月曜が来た。定例会議が早く終わり、同僚たちはそそくさと退社していった。麻里はまだ仕事が残っているので、休憩室の自販機でペットボトルのカフェラテを買い、残業の準備を整える。思えば今週は、毎日残業だった。聡は無愛想ながらも仕事を丁寧^{ていねい}に教えてくれるし、質問にも嫌な顔をせず答えてくれる。出先で一緒にランチをする機会が増えたが、先に食べ終えても麻里を急かしたりしない。

それらはとてもありがたいのだが、聡の冗談ひとつ言わない生真面目^{まじめ}さが、だんだん苦痛になってきた。仕事とはいえ、こும்も仏頂面^{ぶつどうめん}をつきつけられると、もしかしてスワンシユ어의件をまだ根に持っているのではと、不安がよぎる。

しかも麻里が残っている間は、聡も帰ろうとしない。麻里は、付き合わせて申し訳ないと思うのと同時に、なんだか監視されている気分になる。麻里が彼の秘密を喋^{しゃべ}らないように、見張っているのではないだろうか。

うー、やっぱり厄介な上司だよ。

しかし今夜の聡は、席に戻って来るなりデスクの上を片付け始めた。どうやら早めに帰るらしい。

「俺、田村課長の見舞いに行ってくるから」

「そうですか。あの、よろしく伝えてください」

田村は先日、痔^ぢの手術をしたそうだ。しかし経過が芳^{かんば}しくないようで、入院が長引くかもしれないと、田村の妻から連絡があった。

「ああ。お前もそのうち、連れて行くよ。今は手術したばかりだから、もう少し後でな」

「はいー」

そう言ってもらえると、ちょっとうれしい。一課の一員になれた気分だ。ほくほくしていると、片付けの手を止めた聡と目が合った。

「なんだ？ わからないことがあるなら、聞け」

「いいんですか？」

「いいよ。面会時間にはまだ十分間に合うし」

聡は時間を確認し、麻里がデスクの上に広げたノートに視線を落とす。この数日間で、気づいたことやわからないことをまとめてある。厚意に甘えて順次尋ねていくと、聡はすらすらと答えてくれた。

うーん、さすがは葉月主任。

声に出して唸^{うな}りそうになったがそれを呑み込み、麻里はせつせとノートに答えを書き留めた。

「……じゃあ、内装のお色決めの日程の変更は？」

「それはインテリア課の担当者の予定を確認してからだ」

「わかりました。最後に、ジシンサイとコウジセイブ契約書についてですけど……」

麻里がそう言うのと聡の動きがはたと止まり、眉間に皺しわがよる。

「庄野」

「はい？」

「ジシンサイじゃなくて地鎮祭じちんさいだ。あとコウジセイブ契約書も違う。工事請負契約書だから」

「ええーっ？ そうでしたっけ？ すつ、すみません」

恥はずかしい読み違いをしていたことに気づかされ、かぁーっと顔が火照ほる。たぶん過去にどこかで、間違った名称を口にしていたはずだ。ノートのページをめくると、地鎮祭にカタカナでジシンサイとルビを振ったページがあった。

恥はずかしい……。穴があつたら入りたい——！

聡の冷やかな視線が痛い。あの目は絶対に、「お前ほんとに住宅メーカーの社員かよ？」と思っているに違いない。だが、意外にもやわらかい口調で彼は言った。

「いいよ。一人で営業に出るようになるまでに、完璧にしておけ」

「はい、すみません……」

「毎年、お前みたいな新人が必ずいる。漢字の読み違いだけじゃなく、地理が苦手で、鳥取と島根の場所がわからないとか」

うう……。わたしも鳥取と島根の場所がわかりません。それに、新人といっても社会人になった

ばかりって訳じゃないのに……

麻里が唇を噛みそうになると、面倒くさそうに聡が言った。

「続きは木曜にしろ。お前、残業続きだろ？ 先週の休みも出勤したって言うし」

「あ、はい……」

一応は麻里のことを気づかってくれているようだが、聡自身も今週は疲れたようだ。ただでさえ忙しいのに、麻里の指導もあるのだから。

「主任！」

「なんだ」

荷物を持って立ち上がった聡に言う。

「いろいろと無知ですみません。わたし、早く皆さんに追いつけるように努力しますから！」

聡はうなずくと、さっさと帰れと言い残し席を離れた。口数が少ないことが、麻里に対する彼の失望を表している気がして、麻里は急に自信を失くした。

住宅営業の仕事は、家を建てたい人の希望を聞き出しプランを提案することから始まり、資金計画を立てたり内装の相談に乗ったりもして、最後は入居後のアフターサービスにまで及ぶ。住宅に関する知識だけではなく、税金やローンに関する知識も身につけなくてはならない。だからこうして毎日残って勉強しているわけだが、早く覚えなくてはという気持ちがあく回りするばかりだ。やっぱり宣伝部に残ったほうが良かったのかな。

突然、そんな考えが湧いて出る。麻里がもう少し我慢強ければ、失恋を乗り越えられたかもしれない

ない。そうすれば、気持ちも新たに次のCMの企画に参加できただろう。宣伝部は若い部員が多く、企画会議は楽しくて、やりがいがあった。

ダメ。そんな弱気なこと考えちゃ。

大きく頭を振って、マイナス思考を追い払う。転勤は自分の意志だ。少々の失敗で、尻尾を巻いて逃げ出すわけにはいかない。知識や経験の不足は、今後の努力で補えばいいのだから。

今夜は、もう帰ろう。帰って寝て、気持ちを切り替えよう――

麻里はノートに最後のメモを書き込んでから、パソコンの電源を落とした。そこで電話が鳴る。外線だ。急いで受話器を取る。

「お電話ありがとうございます。桜田ハウス住宅営業部、庄野でございます」

「もしもし……、営業部の葉月さんをお願いしたいんですが」

聞こえてきたのは、困ったような女性の声だった。

「お宅の工事現場から、うちの庭にゴミが飛んでくるのよ」

電話の女性は自宅の隣で桜田ハウスの新築工事が行われていると前置きした上で、夕方の強風で、隣から発泡スチロールやビニール袋などが舞い込んで来て困ると訴えた。

現場は支社のすぐそばで、営業担当は聡だ。着工前に挨拶もしている。そのとき、聡から渡された名刺を見て電話をかけた、と女性は言った。

「職人さんはもう帰っちゃったし、何とかならないかしら」

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません。すぐに片付けにまいりますので」

麻里は丁寧に詫言を言うのと電話を切り、まずは聡の指示を仰ぐべく、彼の携帯に電話をした。

しかし出ないので留守電にメッセージを残し、続けて施工現場の管理をする工事部の現場監督に連絡を取った。

こちらはすぐにつかまったが、今は別の現場にいるため、急いで向かっても三十分ほどかかるとの返事だった。

「わかりました。現場は近くなので、先に行って片付けます！」

ゴミの片付けくらい、自分にだってできるだろう。

そう考えた麻里は、現場監督に聞いた場所から現場の鍵を取り出し、ゴム手袋とゴミの回収袋を用意してオフィスを出た。ずっと社内だったので気づかなかったが、いつの間にか外は湿った南風が吹き荒れている。立っているだけで、髪がぐちゃぐちゃになった。

歩いて五分ほどで現場に着く。その頃には雨がばらばらと落ちてきた。

ついてないなあ……。大降りにならなきいいけど。

自らの運の悪さを呪った麻里だが、施工現場を囲っている低いフェンスの内側で、半分口の開いたゴミ袋が地面を転がるのを見た瞬間、それどころではなくなった。

「うわあ……」

ゴミ袋からはみ出た紙くずやビニール袋などがあたりに散乱し、いくつかは隣家の生垣いけがきに引っかかっていた。本来なら施工現場のゴミは、工事に入った業者が分別してその日のうちに支社に運び

込むことになってるが、手違いでここに置き去りにされたのだろう。

麻里は持ってきた鍵でフェンスを開錠して中に入ると、ゴム手袋をはめて、地面に転がるゴミ袋を追いかけて掴んだ。

持参した回収袋を片手に持ち、散らかったゴミを拾い始める。そのあたりで雨が強くなってきた。最低。わたしの新しい靴が――

母と一緒に選んだ靴。防水加工はされているが、この雨の中ゴミ拾いをして無事だとは思えない。しかし、ためらっている場合ではない。迅速に作業を終えないと、会社の評判を落とすことになる。さらには後々、隣家からこの施主に苦情がいくかもしれない。そうなのは、入居後のご近所付き合いにも水をさしてしまう。

風雨の中、麻里はせつせとゴミを拾った。追いかけても風であちこちに飛ばされるので、手間取ってしまう。どうにか拾い集めた頃には、全身がずぶ濡れになっていた。

腕時計を見ると、午後七時を過ぎている。

「おかしいな。三十分経ったけど、誰も来ないじゃない……」

次第に心細くなりつつあったが、すぐに来るだろうと思いい、大きなゴミ袋を抱えて現場監督が来るのを待った。やがて目の前の道路に車が続けて二台停まり、真っ先にスーツ姿の男性が姿を見せた。

「庄野！」

「主任！ 来てくれたんですか？」

聡だとわかった瞬間、麻里は何故だか泣きそうになった。

「ばか、お前……」

聡は傘もささずに、麻里のそばに走り寄った。

「こんな濡れて……。後は俺がやるから、早く車に乗れ」

「わたしは平気です。それよりこのゴミを片付けないと」

「それは俺が持つて帰るよ」

聡の後ろから声が出て、グレーの作業服にヘルメットをかぶった現場監督が顔を出した。

良かった、ちゃんと来てくれたんだ――安心してると、聡が上着を脱いで、麻里の頭の上から

すつぽりとかぶせた。

「とりあえず、これは頼むぞ」

聡は現場監督に回収袋を手渡すと、麻里の肩を抱き寄せて停めてある車に向かって走り出した。

「しゅ、主任！」

「いいから車に走る！」

いいから……

聡は麻里がこれ以上濡れないよう、腕で包み込みながら車まで連れて行ってくれた。突然の行動に麻里は声も出なかったが、彼が助手席のドアを開けてくれたので、そのままおとなしく乗り込んだ。

「ちよつと待ってる。その間に、これで拭いておけ」

聡は後部座席にあったタオルを麻里に押し付けると、再び雨の中に飛び出していった。

好意に甘え、麻里はタオルを顔に押しあてる。髪からぼたぼたとしずくが落ちた。聡の上着にも車のシートにも、一雨がしみていく。

窓の外を見ると、聡はいつの間にか傘をさし、現場監督と手分けして敷地内の点検をしていた。それが済むとフェンスを施錠して、電話をかけてきた隣家のインターフォンを押す。きつと謝罪をするのだろうか。

すべてを終えて戻ってきた聡に、麻里はまず謝った。

「すみません、主任。車の中がびしょびしょに……」

「いいよ、放つとけば乾くだろう」

「主任の上着も濡らしてしまいました。すみま……」

聡は言葉を遮り、麻里の肩にかかっていたタオルを掴んで頭にかぶせた。そして麻里を強引に彼のほうへ向かせ、まるで恋人にするように、優しく髪と頬を拭いてくれた。彼だつて髪とワイシャツが濡れているのに、気にする素振りはない。

「すぐに行くから待つてろつて、電話したんだぞ」

「え？ そうだつたんですか？ わたし、急いで会社を出たから気がつかなくて」

「でも助かったよ。隣の奥さん、ゴミがぶつ飛んできて頭にきたけど、若い女の子が一生懸命ゴミを拾つてのを見たら、なんだか怒る気がしなくなつたつて言つてた」

聡がふわりと笑つたように見えた。気のせいだろうか。麻里の胸がドキンと高鳴る。

「良かった。ご近所とトラブルになつたら、施主様に申し訳ないと思つたんです。だから急いで来

てしまつて」

「そのとおり。お客様を第一に考えて動く。俺たちの仕事つて、まあ、こんなもんだ」

でかしたぞと、聡は麻里の頭をぼんぼんと撫でてくれた。その大きな手のぬくもりに、麻里の心臓はさらにドキドキした。

「とりあえず会社に戻ろう。課長のお見舞いは明日にするよ。あと、今日は送るから」

「え？」

「お前の家まで送ると言つたんだ。どうせ、帰る方向が同じだからな」

聡はぶつきらぼうに言うのと、前を向いて車のエンジンをかけた。麻里は下着まで湿つてきたのを感じて身震いしたが、心は温かかった。

自分は足手まといかもしれないが、彼に嫌われてはいない。そして本当の彼は、やっぱりとても優しい人だと思う。少々、込み入った事情を抱えているようだが。

とりあえず、仕事を頑張ろう。頑張つて、もつと主任に褒めてもらおう。そう胸に誓い、麻里は急いでシートベルトを締めた。

支社に麻里が来てから、あつという間にひと月が経とうとしている。気がつけば七月も下旬。上

司の田村は無事に退院したものの、経過はあまり良くないようで自宅療養中だ。復帰は、八月になりそうだと聞いている。

聡は隣の席で電話をかけている麻里の横顔を眺めながら、この一か月を振り返った。多少の突っ込みどころはあるものの、麻里は熱心に仕事に励んでいる。大いに結構なのだが、問題はそこではない。

長い間、職場の者には隠してきた自分の秘密を、この新参の部下が知っているのだ。なんで、うちなんだよ。ハウスメーカーなんて、掃いて捨てるほどあるつてのに！

受話器を持つ彼女の綺麗な指先に、心の中で悪態をつく。

七夕飾りの揺れる六月の終わり、仕事が早く終わった聡は、立ち寄ったデパ地下で一人の女性とスワンシューを取り合った。

彼女は住宅関係の仕事をしていると言ったが、その時点では本社から異動してくる女性だとは夢にも思わなかった。聡が彼女にスワンシューを譲ったのは、同業者と聞いて仏心ぼんしんが出たのと、彼女の必死な訴えに胸を打たれたからだ。

その結果、「甘いものには目のない男」であることが部下にばれる——という、予想だにしない事態を迎えてしまった。

職場ではクールに振る舞っていても、プライベートでは違う。

聡は両親と姉二人という家庭で育った。病気がちだった母がたびたび入院していたので、家事は父や姉たちと交代で行っていた。

中学三年のときに母が亡くなると、仕事が忙しい父と料理センスゼロの姉たちにかわって、聡が日々の食事の支度しだを引き受けるようになった。当時、聡は剣道部に在籍していた。その練習に参加しながら弁当や朝食、夕食作りをするのはかなり大変だったが、慣れてくると料理が楽しくなった。甘党に拍車がかかったのも、その頃だ。聡は小さい頃からケーキやまんじゅうが大好きだった。中学になると、姉たちに連れられてジャンボパフェの食べ歩きに精を出すようになり、近所では甘党男子として知られるようになった。

ところが、中学を卒業してすぐの春休みのこと。

二人の姉と共にファミレスでパフェを食べていると、姉の友人と会った。何度か家に遊びに来たことのある彼女は、勝気な聡の姉たちとは違い、どこか古風でしとやかで、聡はひそかに憧れていた。しかし聡がトイレに立ったとき、

「あの子、あんなに背が高くてかっこいいのに、甘党なの？ かっこ悪い！」

と言ったのを聞いてしまったのだ。大人びて見えても、当時の聡はまだ十五歳。姉に言われるならまだしも、憧れていた彼女のその言葉は聡の心をぐさりと傷つけた。

聡が甘党であることを隠すようになったのは、それからだ。

同じように、料理や家事が得意であることを他人に知られるのも嫌になった。ありのままの自分を見せて、外見とのギャップに呆れられることが耐えられなかったのだ。

気がつけば社会人となり、まわりにはクールで甘いものが苦手な葉月というイメージが定着していた。

それでいい。そう思ってきたのだが……

『三十だろうが四十だろうが、好きなものは好きでいいと思います』

麻里の言葉に、聡は心を動かされた。照れ隠しで思わずキツイ言葉を返してしまったが、内心、聡はうれしかった。あんなふうに言ってくれたのは、麻里が初めてかもしれない。何しろ聡は、姉以外の女性の前では、スイーツ嫌いを通してきたのだから。

初めて会ったデパ地下で、麻里は長い髪をなびかせ、すらりとした脚を惜しげもなく晒したショートパンツ姿で、聡の前を横切った。

かわいい子だなとつい見とれていたら、彼女は突然目の前でつまずいた。

聡は慌てて腕を出し、麻里を抱きとめた。そのとき、ほとんど化粧もしていない、ナチュラルな女つぼさに強く惹かれた。

そう。惹かれたんだ。

だから会社で再会したときには、驚いたと同時に胸が躍った。とはいえ、前日のスワンシューの一件から多少の気まずさも感じ、気づくとキツイ態度をとっていた。それでも彼女はめげることなく、頑張っているようだった。そしてあの日、施工現場で雨に濡れながらゴミを片付けていた、彼女のひたむきさに心打たれた。

毎日仕事で連れまわしていれば、麻里が自分の秘密をばらさないか監視できると思ったが、いつの間にか、彼女と過ごすひと時に聡は癒されていた。

彼女は聡の秘密を知っているから、自然体でいられる。少しそっかしい彼女に突っ込みを入れ

ることは楽しいし、ランチの後は気兼ねせず、甘いスイーツを食べられる。

そんな毎日が、日に日に楽しくなりつつある。

でも、それを彼女に知られてはいけない。課長が不在の今、聡の役目は麻里に仕事を教え、一人前の営業部員として独り立ちさせることなのだから。

「主任」

「ん？」

ちようど電話を切った麻里が、恐る恐る声をかけてきた。

「あの……、わたし、何か変なことをしました？」

「いや、別に」

見ているうちに、どうやら怯えさせてしまったようだ。聡は、慌てて自分のデスクに向き直る。だがすぐに、

「俺、コーヒー買ってくる」

と言って席を立つと、麻里の返事を待たずにオフィスを出た。静かな夜のオフィスは危険だ。麻里の持つやわらかい雰囲気、引き込まれそうになる。

背後から足音がして、吉祥寺が隣に並んだ。彼は帰るところらしい。

「毎日頑張るなあ、麻里ちゃん。お前、少し無理させてやしない？」

馴れ馴れしげに「麻里ちゃん」と強調すると、吉祥寺は、自販機の並ぶ休憩室までついてきた。

「そんなつもりはない。まあ庄野自身、仕事熱心ではあるな」

「ああ、見てりゃわかる」

この変わった苗字の同期は、実は高校の同級生でもあり、同じ剣道部で三年間厳しい練習に耐えた同志でもあった。

高校を卒業後、聡は二度と剣道はしないつもりだったが、桜田ハウスに入社して吉祥寺と再会した際、彼に誘われて久しぶりに竹刀を握った。

今では月に一〜二度、マンシヨンの近くにある市民体育館の武道場で稽古をするようになった。

「ところでお前さ、あんまり彼女を独占すんなよ」

「独占?」

吉祥寺はニヤニヤしながらすり寄って来た。

「毎日、朝から晩までつきつきりじゃん。営業にも連れて行くし、残業中も一緒に残ってる。これじゃ飲みにも誘えないって、一課の奴らが文句たれてるぞ」

「仕方ないだろう。面倒見ろって、うちの課長に言われたんだから」

「なるほど! 田村課長の指示かあ」

吉祥寺は大げさに言うが、事実だ。田村課長は入院後すぐに病院へ聡を呼び出し、自分がいない間、本社から転勤してくる女の子の面倒を見てやってくれと頭を下げたのだから。その日、指導についての打ち合わせなども病室で行った。

「じゃあ、課長のせいだってことにしとくよ。しかし、真面目だね、あの子は」

「ひと言多いぞ。けどまあ、確かに何かを忘れるみたいに一心不乱に仕事してる」

「それって、別れたオトコだったりして」

「そういうのは、俺は関知しないんで」

「そうかい、そうかい。クールな葉月ちゃんらしいお言葉だよな。でも麻里ちゃん、お前のことを怖がってないか? パワハラだとかわれられないように、残業はほどほどにさせとけよ」

偉そうな口ぶりで言うと、吉祥寺は帰って行った。

怖がって、か――

無きにしてもあらずだ。自分の気持ちを悟られないよう、聡はつい厳しく麻里に接してしまう。それがベストだと思っていたが、はたから見たら度を超しているように感じられるのだろうか。

聡は、自販機で麻里がよく飲んでいるペットボトルのカフェラテと缶入りのココアを買った。オフィスに戻ると、ところどころ暗くなった室内に麻里の後ろ姿が見えた。長い髪を一つにまとめ、紺のジャケットの背中に垂らしている。

すぐそばまで近づいたものの、聡は吉祥寺の言葉を思い出してしまい、なんと声をかけたらいいかわからなくなった。

「主任」

声に驚いて我に返ると、怯えたような麻里の視線とぶつかる。黙って彼女の背後に立っていたのはまずかった。無言の圧力を感じさせたのかもしれない。

「どっちがいい?」

聡は取りつくろうように、彼女の机の隅にカフェラテとココアを並べて置いた。

「ありがとうございます。あ、お金……」

机の引き出しを開けて、財布を取り出そうとした麻里を制する。

「おごりだよ。いらなんなら、俺が持つて帰る」

「いえ、いただきます」

麻里はカフェラテを選ぶと、キャップを開けて、引き出しから取り出したストローを差す。唇を尖らせてちゅーっと吸い上げる姿は、妙にかわいく見えた。

残ったココアを聡が手にすると、麻里がじっと見つめてきた。

「誰も見てないし」

聡は室内を見渡し、自分たち二人しかいないことを確認してから、缶を開けた。甘くてホットする味は、子どもの頃、母が作ってくれたミルクたっぶりのココアを思い出させた。

「明日は早出だし、これを飲んだら帰ろう」

「はい……。あの、主任」

「ん？」

「……ほんとに、何もありませんよね？」

心配そうに麻里は言う。叱られるのではと、勘違いしたのかもしれない。

聡は手にした缶を強く握りしめた。

違うよ、ただ声をかけて、話をしたかったんだ。

厳しくするのは、彼女が憎いからじゃない。

聡はココアを飲みながら、日に日に膨らんでいく麻里への思いを自覚した。

6

ふいに黙り込んでしまった聡を残し、麻里は一足先にオフィスを出た。疲れているのだろうか。今夜の聡は、虫の居所が悪いみたいだ。あの雨の施工現場で、聡は麻里の頭をぼんぼんと撫でてくれた。優しい人だなと思ったが、あれ以降、特別なことは何も起こらない。

以前の、クールな葉月主任に戻ってしまった。少し寂しい気もするが、麻里が今すべきことは彼と仲良くなることではなく、早く仕事を覚えることだ。

聡の仏頂面を見るたびに、麻里は自分の胸にそう言い聞かせた。

明日からの二日間、二階のショールームでは数か月に一度の大掛かりなイベントがある。営業は早朝に出勤して準備をしなければならず、今夜は皆、早めに退社していった。

もう少し勉強していきたかったが、麻里は聡の言葉に従うことにした。ところがホールでエレベーターに乗ろうとすると、背後からバタバタと足音が聞こえた。

「待て、俺も乗る」

バッグを小脇に抱えながら、聡が駆けて来る。

「あ、はい。どうぞ」